

2025年3月25日

T.Kobayashi

大相撲春場所観戦日記
(やはり 荒れた 大阪場所)

初日は誰がつまずくだろうか、しかるべき地位にいる力士の内誰が負けるだろうか、と番狂わせを期待しているお客さんも少なくない。特に新横綱や新大関が登場する場所ならば、なおさらのこと。

●初日から四日目まで

初日の結びの一番、豊昇龍はやや腰高の立ち合いで阿炎の両手突きを受けて、あっけなく土俵外へ運ばれてしまった。やや粗雑な立ち合いだったように感じた。

二日目、若隆景を速攻で征して本来のペースに戻ったようだったが、多くの平幕力士は横綱を倒して「金星」という給与加算を狙ってくるので、気をつけないといけない。

二日間の相撲を見た感じでは、大の里の取り口が目立った。膝を曲げて腰を低くして相撲を取っており、安定感が感じられた。

三日目を終えると、リズムに乗ることができた力士とそうでない力士が少しずつ見えてきた。

3勝無敗とした力士は、朝紅龍・阿武剋・遠藤・高安・阿炎・大の里の6人で、幕内力士42名中16.7%。大の里と高安の取り口に安定感と力強さが感じられたが……。

四日目、その二人にも土がついてしまった。高安は翔猿の執拗な粘りに屈し、大の里は腰高のまま動き回り、重心の低い若元春に好きなように取られてしまった。四日目が終わったところで、全勝は平幕の遠藤と阿武剋だけになってしまい、この先が心配になってきた。

●五日目が終わった

阿武剋は獅司のやや変則的な上手投げに振り飛ばされて敗退。遠藤は伯桜鵬の速攻相撲に寄り切られて、これまた敗退。先場所は9日目まで平幕の全勝力士が先頭を走っていたが、今場所は5日目にして全勝はいなくなってしまった。

大の里は、膝を曲げた腰の低い体勢を取り戻して、くせ者翔猿を難なくさばいたが、豊昇龍は不用意な立ち合いで千代翔馬の奇襲に敗れて、3勝2敗と再び後退した。

結果として1敗の先頭集団は、大の里・高安・伯桜鵬・遠藤・阿武剋・獅司・美ノ海の7力士となり、後続の2敗力士は17人という混戦・乱戦の状況で、平幕優勝の可能性も出てきた。

●そして先頭集団の動きは？

幕内力士42人の中から賜杯争いに向かって絞り込まれて行く過程を数値で追いかけた表を作ってみた。(次頁別表：中日までの成績分布の推移)

勝ち抜き戦ではないし、トーナメントでもない、「15日間の部屋別総当たり」なので、図抜けて強い力士が存在しない状況だと、どんな展開になってしまうのか想像が難しい。

初日の戦いで勝った21人が先頭集団になって二日目に向かう。21人から12人→6人と絞られて、四日目に全勝力士がいなくなると、次の1敗力士7人が飛び出してくる。

そして、その1敗力士もさらに絞り込まれて、7人→4人→3人 となり、2敗以下の力士も激しい星のつぶし合いになっていることが、この表からもよくわかる。

●中日が終わって見たら……

幕内の取り組みは、安青錦・白熊戦を皮切りに熱戦や内容のある取り組みが続き、見応えがあった。中でも美ノ海・朝紅龍・翠富士等さほど体が大きくはない力士が正攻法で勝っていたのが目立った。明生の速攻両差し相撲、玉鷲の力強い突き押しも光り輝いていた。

大の里が一山本に攻め込まれて土俵際で辛勝のあと、豊昇龍は高安の粘り強く、力強い相撲に翻弄

されて3敗目。粗雑な相撲ぶりが随所に現れていた。

中日を終えて、7勝1敗の大の里・高安・美ノ海が先頭を走り、その後を6勝2敗の三力士が追いかけるという形になった。後半戦の流れ次第では12勝3敗以下の低レベルの優勝もありそうな気配。

中日までの成績別分布の推移(勝-敗)

初日	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	中 日	
1-0 21人	2-0 12人	3-0 6人	4-0 2人	5-0 4-1 7人	6-0 5-1 4人	7-0 6-1 3人	8-0	
							7-1	大の里
							3人	高安、美ノ海
			6-2	尊富士、玉鷲				
		3人		明生、				
		5-3	豊昇龍、琴櫻					
0-1 21人	1-1 18人 0-2 12人	2-1 18人	3-1 12人	3-2 17人	4-2 11人	4-3 14人	10人	大栄翔、若元春 伯桜鵬、翠富士 阿武尅、獅司 安青錦、朝紅竜
							4-4	
		1-2	1-3	2-3 10人	2-4	3-4	3-5	
		0-3	0-4	1-4	1-5	2-5	2-6	
		0-5	0-6	1-6	0-7	1-7		

●九日目

安青錦・生田目戦、時疾風・美ノ海戦、朝紅龍・獅司戦と熱戦が続き、清々しい気分で鑑賞を開始。

美ノ海は時疾風に敗れて3敗に後退したが、知恵と力を出し切った取り口で見ても満足。

突き押しで勝負をつけたかった玉鷲を遠藤が見事に掬った相撲も見応えがあったし、伯桜鵬・尊富士の相撲も尻上がりに良くなってきた。どの取り組みも目が離せない。こういう日も珍しい。

高安は激しい動きの中で琴櫻を下し出し投げて転がし、力強さと勝負強さを感じさせた。

大の里は、阿炎を素早く捕まえて土俵外に運び去った。

豊昇龍は立ち合い後の攻防の中で、一山本にすくい投げて転がされてしまった。取り組みの流れをよく見ると、豊昇龍は一山本を舐めていたように感じた。

そして、1敗も2敗も3人から2人に減り、賜杯争いは4人に絞られた。明日の取り組みで大の里・高安戦が組まれたが、興行的には「早すぎ」のような気がする。

●十日目

安青錦・獅司・朝紅龍など若手力士の元気な相撲と、高安・玉鷲・佐田の海などベテラン力士の活気のある相撲が、今日も場所を盛り上げた。

この日の目玉は大の里・高安の直接対決。35才の高安が力強く若々しい取り口で24才の大の里を下して単独トップに躍り出た。まだ5日あるので展開の予測は難しいが、明日は尊富士・美ノ海の直接

対決もあり、少しずつ景色が見えてくるのかもしれない。

豊昇龍の休場が発表され、琴櫻が5敗目を喫したので、この先大の里が崩れるようなことがあると、どうしても相撲協会は看板力士不在ということになる。

●十一日目

美ノ海・尊富士は頭と頭でぶつかり合う立ち合いで、何事かと思うような音が響いた。特に、尊富士の鋭い当りと素早い攻めが光り輝くようだった。

高安は霧島のいなしに横を向いてしまっただけでなく敗退し、単独トップは一日で終わってしまった。

大の里は宇良を難なくさばいて2敗を堅持。トップ集団から美ノ海が消えて、三人が並ぶ形になり、その後を追う3敗に、大栄翔・玉鷲・美ノ海・安青錦の4人が並んだ。

明日の大の里・尊富士の直接対決でさらに絞り込まれるのか、それとも残り4戦の中で、3敗力士を交えた混戦の状態になるのか？

三段目西21枚目の朝乃山が6戦全勝で、三段目優勝の可能性が大きい。

●十二日目

安青錦は、低い姿勢の相撲を取る明生を相手に、さらに低い姿勢を保ちながら脚と腰の安定を保ち攻め勝った。派手さはないが、基本を押さえたきちんとした相撲が身に付いており安心感がある。

玉鷲・霧島戦も面白かった。玉鷲の鋭い突き押しを交わそうとして回り込む霧島を執拗に追いかけて続けた玉鷲に凱歌が上がった。3敗を守り、無気味な存在になってきた。

高安・王鵬戦も似たような展開になった。高安の鋭い攻めを交わそうとする王鵬を攻め続けた高安が勝った。いずれの取り組みにも共通しているのは、「攻め続けている者が強い」ということだった。

相星決戦の大の里・尊富士戦は、尊富士が頭であたる響きの音で始まった。土俵際に詰まった大の里がくると廻るように叩き込んで辛うじて勝ち星を拾った。大の里は勝負には勝ったものの相撲では負けていた。とは言え、この日の1勝は大きかった。高安とともに2敗でトップを守った。

大の里と高安の直接対決はすでに済んでいるので、「千秋楽までに負けないこと」が優勝の条件。

後を追う3敗の力士は3人に絞られ、残り4日で賜杯を争うのはこの5人になった。

十両では、新十両で12戦全勝の草野の優勝が決まった。新十両全勝優勝が実現するかもしれない。

●十三日目

ことによると……と思われた玉鷲は美ノ海に激しく動かれて微妙な相撲で、残念ながら敗退。

高安は回転の速い突っ張りで若元春を寄せ付けず突き出して2敗を守ったが、大の里は王鵬の鋭い攻めに引き技を出して墓穴を掘り3敗に後退。今場所の大の里の相撲はこのパターンが目立つ。

昨日まで3敗で並んでいた3人がそろって敗れたため、2敗の高安を3敗の大の里が追う形になり、高安がやや有利に見える形にはなったが、まだ二日あるので何が起きるかはわからない。

いつものように、私の目で見た今場所の三賞候補を掲げて見た。高安・大の里いずれかが優勝するとすれば、殊勲賞の高安は動かないところだろう。敢闘賞は、若手力士から選べば安青錦、ベテラン力士から選べば玉鷲・高安ということだろうか。技能賞は美ノ海しか思い浮かばなかった。

●十四日目

高安は、低い姿勢からしぶとく素早く相撲を取る美ノ海に上手く取られてしまい完敗。これが、私が美ノ海を技能賞候補として推す由縁である。高安の初優勝を期待するファンはがっかりしたに違いない。

大の里は大きく踏み込んでかちあげで大栄翔を起こして突っ張らせることなく押し出した。

かくして、両力士ともに11勝3敗で千秋楽にもつれ込むことになった。まさか、千秋楽に二人とも負けて4敗になってしまうことはないと思うが、4敗で残っているのは美ノ海・安青錦・時疾風の三人。

●そして、千秋楽

玉鷲が獅司を力強い相撲で押し出して10勝5敗で締めくくった。「三賞受賞者の中に玉鷲の名前がないのはおかしい」と、解説の琴風さんが異論を唱えていた。

賜杯の行方と無関係な翔猿・宇良戦が面白かったし、会場の盛り上がり方も一番だった。

高安は阿炎の動きを封じた上で、上手出し投げで仕留めて12勝3敗で終り、結びの一番を待った。

安青錦は終始低い姿勢を保ち、王鵬の攻めに対応し、攻防の中で左膝を上手く使った切返して勝って11勝4敗の好成績を収め敢闘賞。取り口の随所に師匠（元安美錦）を感じさせるような技術が散りばめられており、今後が楽しみな力士になってきた。

美ノ海は関脇大栄翔の突き押しを封じるような厳しい取り口で11勝4敗、敢闘賞を手にした。

大の里は立ち合いの力強い踏み込みと体当たりで琴櫻に圧力をかけ、正面に寄り切った。

そして優勝決定戦も鋭い踏み込みの大の里が、高安の粘りに勝ち、優勝決定。日によってはたついたり、引きや叩きがあったりの安定性に欠けた大の里は、千秋楽の本割り・決定戦ともに、勢いと落ち着きのある取り口に戻っていた。

後半戦の優勝争いの流れ

	中日	9日目	10日目	11日目	12日目	13日目	14日目	千秋楽
1敗	大の里 高安、美ノ海	大の里 高安	高安					
2敗	尊富士 玉鷲、明生	尊富士 美ノ海	大の里 尊富士 美ノ海	大の里 高安 尊富士	大の里 高安	高安		
3敗	10人	7人	5人	4人	尊富士 玉鷲 安青錦	大の里	大の里 高安	大の里 高安
4敗				5人	5人	6人	美ノ海 安青錦 時疾風	美ノ海 安青錦

●終ってひとこと

豊昇龍の過去の成績を見ると、六場所（一年間）続けて10勝以上をあげたことはない。横綱昇進前六場所の内二場所は10勝未満の成績で、このリズムは関脇時代から変わっていないので、統計的に見れば、今場所の成績不振は予測の範囲だったのかもしれない。安定度（成績のばらつき）という点にも着目すべきではないか。

大の里は、腰高のままで突っ走ることがあり、そこを突かれると引きや叩きが出る癖がある。負けた相撲は殆どがこのパターンであり、この悪癖を乗り越えて次の段階に進むには、立ち合いの速さと鋭さをマスターする必要がある。

新大関に昇進したがすぐにカド番を迎えるケースが多い。琴櫻に限らず、何人もの大関が同じようなことを繰り返しており、それが横綱推挙にまで繋がっており、年々弱体化・衰退の危機と見ている。

大の里についても、来場所は横綱昇進騒動になることと思うが、ここ六場所優勝した三場所以外は9勝か10勝しか上げていない。まだその程度の実力であることを認識しておく必要がある。

いずれの力士の場合にも言えることであるが、六場所（一年間）を一定レベル以上の成績で走ることができる力があるか、を見極めて大関昇進や横綱推挙を決めていく必要があるように感じる。

以上